

下向から上向へ——リカード『経済学原理』の経済学史上の位置

櫻井 毅

1

昭和25年、武蔵高校を卒業して、私はそのまま前年に出来たばかりの新制の武蔵大学に入学したのだが、それは、高校の卒業前の12月に発症していた結核の療養の継続を休学なしで実現できる選択のつもりであった。しかし実際には、大学に行くことはほとんどなかった。3年ほど経って突然、病気が治っていたことが分かり、大学4年目にして初めて経済学の勉強らしいことを自分で始めることにしたが、それはリカードの『経済学原理』を原典で読むということであった。きっかけは、健康が回復した以上、卒業後の道を思案しながら、とりあえず何とか早く今の状況から脱出しようとして、卒業に必要な単位を大慌てで集めなければならなかったときに、ゼミと外国書講読という科目が必修で、そのため真っ先に取ることに決めたのが岡茂男助教授の「リカード経済学原理」の講読だったことだ。そして、それがはじめからとても面白かったということがあった。ただ授業の進みがひどく遅く、買わされたテキストそのものも中途半端なものだったので、自分でGonner版の古本を買ってきて先を読み始めたのだ。英語そのものは格別難しくなかったのだが、内容を理解するのがなかなか困難であった。今までそういう類いの英語の本は読んだことがなかったのも、挑戦の意欲を生む理由になったのかもしれない。岩波文庫でとても厚い小泉信三訳の古い1冊本が幸いわが家にあったので参照することも多かったが、この翻訳も古風でなじみにくい文章であった。この小泉訳本はその後改訳されて2冊本になったのであらためて買い求めたが、その文章は相変わらず古臭いままで、まったく代わり映えない印象であった。

リカードの『経済学原理』は、その後、別の大学の大学院に進学してからも、Sraffa版などで、初版の第1章を含めて何度も読み返したから愛着もあるし、今でも考えさせる刺激的な内容にとっても興味を持っている。私はたまたま、その後、大学院を経て研究を職業として武蔵大学に奉職することになったのだが、東大の院生として最初に書いた論文もリカードを扱ったものだったし、以後マルクス研究に専念するきっかけもリカードにあったような気がする。また、リカードについては後でも何度

か論じる機会があった。そういうわけでリカード経済学の研究は自分の研究者としての原点だったかもしれないと思うことがある。

2

リカードの『経済学原理』は戦前から古典として経済学を学ぶ学生によく読まれていたようだが、戦後もしばらくは広く読まれていたと思う。もちろん戦後はアダム・スミスの『国富論』も人気があった。今は特別の篤学の経済学者を別にすれば、自分の論文執筆に直接役に立つ文献を探し読みするのに精いっぱい、誰も古典に目を向けない。ただ、いずれにしても、戦後の一時期、古典研究が熱心に行われた理由の一つに、リカードやスミスの経済学の研究が、戦時中禁じられていたマルクス経済学研究の隠れ蓑であったこともあるようだ。いわゆる近代経済学の研究の方は、戦時中がようやくケインズ革命の始まった時期で、まだ関心を持つ者も少なく、ごくわずかの好学の若手研究者が個人的に研究を始めたばかりであり、あとは悪名高き「皇道」経済学などを避けるとすれば、経済学説史の研究に沈潜するのは、当時の真面目な経済学徒にとっては、ほかに選びようのない逃げ道であったともいえる方向なのであった。その戦時中の蓄積が戦後の経済学史研究の隆盛となって現れてくるのであるが、私のように戦後間もない時期に経済学入門し、簡単には新しい研究成果に接する機会を得られなかった未熟な学生は、せいぜい戦前の森耕二郎『リカード価値論の研究』(1926年)、堀経夫『リカードの価値論及び其の批判史』(1929年)、波多野鼎『価値学説史(正統派の価値学説)』第一巻(1928年)などを繰り返し読むしかなかった。それらは大学図書館に常備され、また戦後もひどい用紙で増刷もされていて、本屋でもよく見かけた。それらの優れた解説を通しておぼろげながらにリカード理論の核心は少しは理解できたような気がしたものだ。その後、研究は価値論だけでなく地代論、蓄積論などの分野に広がり、同時にマルクスの『剰余価値学説史』の研究に没頭することになっていったのだが、最近の日本では、以前のように活発にリカード研究が行われているとは言えないようだ。リカードに関する理論的

興味がより精緻なマルクス経済学研究の方に向かったためもあったらうか。だから逆にリカードに対する関心が薄れたのだろうか。リカード研究にはもちろんそれ自体独自の意義があり、例えば、新リカード派としてスラッファの学説がかなり注目されて論じられたこともあったが、今はそれほどでもない。あるいは日本では経済学史の研究の主流が理論研究から経済思想の研究の方に流れている傾向があったからかもしれない。それも今はスミスとその周辺のスコットランド啓蒙の研究に集中している印象がある。どういう理由であるにせよ、未だにリカードやその周辺の学説研究にこだわりの残っている私にとっては、日本における経済学説史の理論的研究の停滞は寂しい限りである。

そういう状況の中で、私は昔の頃のことを思い出しつつ、最近のリカード研究がどうなっているのか知りたかった。日本を含めて世界のリカード研究の現状を紹介した立派な本が最近英文で出版されたという事実が啓発されたということもある。そして英語の文献だけしか載っていないのが残念だが、John Cunningham Wood 編集の *The Croom Helm Critical Assessments of Leading Economists* の中に *David Ricardo : Critical Assessments* というシリーズがあり、1985年というやや古い刊行ながら、その全4分冊からなる浩瀚なリカード研究論文集の中に、近年の研究を含めた欧米のリカード研究の動向と成果を見ることができるとふと思った。以前、購入して持っていたのだが、ほとんど利用することなく、書架に置かれたままになっていたのだ。このところ嫌々進めている蔵書の整理の対象になるとして開いてみたのだ。ところどころに鉛筆の書き込みが少しあったから、全然読んでいないことはなかったようだが、ほとんど記憶は残っていない。その中にはるか以前の発表の折に、私が直接雑誌で読んでいた論文もいくつか収められていて、懐かしい思いがしたが、他方で知らなかった古い論文も、重要な貢献としていくつか掲げられてあるのにも気がついた。すでに戦前日本でも翻訳された『リカード研究』の著書のある J.H. ホランダの論文やリカードの著書の編者としても名高いゴンナーの論文などが挙げられていて、未読であるだけに興味をそそる。この論文集は第1分冊でリカードの伝記とその思想の輪郭を扱った論文を集め、第2分冊はリカードの『経済学原理』そのものを対象にした論文を扱う。第3分冊では、リカードの様々な経済分析を検討した論文が中心で、最後の第4分冊が、リカードについての特殊なテーマを取り上げた論文を集めるという構成になっている。リカード研究にこころざす者にとってはまさに貴重な文献集といってよからう。収録した論文数は

110に及んでいる。

今更ながらではあるが、面白そうなので、俄然思い立ってそこからいくつか選んで読んでみようと考えた。昨年、年来の宇野理論についての考えをまとめた本を書いて出版したせいで、書き落した問題が残っているのが気になるものの、あわてて書かなければならぬ次の大きな目標が当面なくなって、気が緩んだということもある。大学を辞めてから二十何年、その間、本や論文もかなり書いてはきたが、八十八歳を今年さらに越えて、ようやく少し暇ができたためもある。当然、何の目的があるわけでもない。ただ何が書いてあるか読んでみたいと思っただけだ。そして中身を、つれづれなるままに読み砕いていこうと考えたのである。浮世を離れて、古人のように方丈ならぬ、しかし同じように小さな部屋の片隅で、横文字をゆっくり読むのも、新型コロナ・ウイルス禍のもたらした新しい人生の過ごし方やもしれぬというところだろうか。筆でも万年筆でもないパソコンのキーの操作でこんなものを書こうと考えていると、気持ちが異様にものぐるしくなってくるのも、ひたすら蟄居して話す相手もなく無為に時を過ごすしかない哀れな老人のたわごとにしぎないことを感じているせいかもしれない。

3

第1分冊の最初の論文は、匿名氏 (anonymous) の小論、Ricardo's Use of Facts (リカードの事実の取り扱い方)、*Quarterly Journal of Economics*, Vol. 1, July, 1887. であった。とても最近のものとは言えなかったが、冒頭に掲げられた論文でもあり、必読文献なのであろう。すごく短いものでもあるので、一応読んでみることにした。

この論文集の編者 Wood の解説 (Commentary) によると、その匿名の論者は、リカードが事実の理論化への興味だけで、「事実」の取り扱いの方法を欠いているという繰り返される批判に言及し、リカードは自らの著書 (『経済学原理』) を一般の人に読ませるために書いたのではなく、彼自身の考えをまとめて主張するために書かれたので、その著書の出版自身も彼の友人の後からの勧めによるものだったらしいとしている。そしてもしリカードが一般の人のために書いたとしたら、豊富な事実の利用と議論の根拠を十分に示しただろうと強調している、とその内容を要約している。そんなことあるのかなと思って、この覚書的小論を読んでみた。

この論文は、旧学派の経済学者に対する昨今の批判の中でしばしばでてくる話題は、当然のようにリカードがただ理論作りが好きなのだとして理解しておけばいいところから出てきている、という指摘から始まっている。

そして一般的には、リカード自身は実業の人なのに、むしろ経済学についての著述家のように思われており、大部分の読者にとっては、リカードは洞窟の中で書いている奇人のようで、その考え方は現実の生活の営みにとっては全く関係のない出来事を描いているように映っているらしい、という。それでもリカード自身は結論を決めてゆくのに事実がその役割を演じていることを想定していると、匿名の筆者は言う。さらにその言うところを聞いてみよう。それによると、リカードはその代表的な著作、すなわち『経済学原理』の「序文」の中で、次のように述べているという。つまり自分が扱った問題について、著者なりの最善の考察を与え、また、何人かの優れた論者から議論も引き継ぎ、さらにそれが、ごく最近になって現れた多くの事実の変化によって現在の世代に引き起こされた価値ある体験の結果である以上、自分の見解を述べることにについて、出過ぎたこととは思わないでほしいと希望を述べていたというのである。確かに「序文」にはそう書いてある。にもかかわらず、リカードは、この論文の筆者によれば、続くその論考の中では、背景の事実は証拠あるいはその他の形で引用が行われることがほとんどなく、事例でさえ著者によって想定された場合だけなのである。

これは明らかに異様だと、論文の筆者も考えたのであろう。しかし他方で、このリカードの特徴は、その『経済学原理』が書かれ出版されたいきさつを知れば、十分説明できるというのである。もちろんリカードの体系の形式的な説明としての対象世界は今や古いものになっているし、また、その説明も、リカード自らが告白しているように、不十分なままになっているが、次のことには留意しておく必要があると言うのである。どういうことかといえば、最大の情報源になるとされるリカードと同時代人の J. R. McCulloch の言によると、リカードがはじめから出版するために執筆されたかどうかについては少なくとも疑問符が付くからであり、リカードは出版することをためらい、評判になるかどうかに賭ける気持ちにはなれなかったのだというわけだからだ。そして、「しかしながら最終的には、リカードは彼の友人の懇願によってその著作を出版社に送ることを認めさせられた」と言う。ジェームズ・ミルこそがリカードを説得した友人の一人であると、ジョン・スチュアート・ミルの権威を借りて筆者も述べているというのだが、事実、ジョン・ミルは自らの『自叙伝』の中で、リカードの著作が「私の父の嘆願と強力な激励なしには絶対に執筆されなかったであろうし出版もされなかったであろう。というのは最高に謙虚な人として、リカードは自らの学説の正しさを深く確信していたとはいえ、彼は文の構成や表現を十

分に実行することができるという自信がほとんどなかったもので、出版するという考えにひるんでしまっていたのである」と、その状況を伝えているのである。

4

この辺のことになる、すでにスラッフアの編集した『リカード全集』に目を通した者であれば、当然合点がゆく。リカードとジェームズ・ミルとの往復書簡が第二次大戦中に偶然発見されて、戦後、新しいスラッフア編集『リカード全集』に初めて収録され公刊されて注目を浴びた事実があるからであり、それによって如上の問題とリカードの『経済学原理』執筆に対するジェームズ・ミルの役割やその貢献ぶりなどが、息子ジョン・ミルの『自叙伝』の叙述以上に、より具体的により詳しく明らかになったことを知っているからである。

上記で引用した J. S. ミルの『自叙伝』の中の言葉にもあったように、リカードの『経済学原理』の執筆や刊行についての貢献やその他の大きな役割については、すでに何人かの人が語っている。先に引用されていたマカロックの言明もそうだが、年代を下って W. J. Ashley など、「リカードに（『経済学原理』）を執筆するよう強制し、さらにその進行を秩序立て、その宣伝を組織して、他の誰よりもたくさんのことをしたのはジェームズ・ミルであった」（The present position of political economy, *Economic Journal*, Vol. 17. No. 68, 1907, p. 469）と述べているほどだ。だがそれを推測でなく事実で証明したのが、リカードとミルとの往復書簡の発見によることは間違いない。その往復書簡は『原理』執筆の数年前から始まっているが、その内容を追ってゆくと、二人の交友関係も明瞭になってくる。

この新しく発見された往復書簡については T. W. Hutchison の James Mill and the Political Education of Ricardo, *Cambridge Journal*, Vol. VII No. 2, Nov. 1953. がある。リカードとミルのリカード『原理』の出現までの交流関係を新しく発見された往復書簡を中心に紹介した極めて興味ある論文であった。私が 1971 年から 72 年にかけてロンドンに留学した際、LSE の図書館で、古い雑誌を拾い読みしていた時に、たまたま発見して読んだものだ。それに啓発されて書いた拙論「ジェームズ・ミルとリカード理論の形成」、（『武蔵大学論集』23 巻 1・2・3 合併号、1975 年）もさらに広くその問題を扱っている、より詳しくお知りになりたい向きは、参照されたい。なおハチソンの論文についてはのち大幅に改作され、James Mill and Ricardian Economics と改題されて、*On Revolutions and Progress in Economic Knowledge*, Cambridge, 1978 の第 2 章に収録されている。また拙論

については、拙著『イギリス古典経済学の方法と課題』（ミネルヴァ書房1988年）に収録してある。

したがって詳しいことはそちらに譲るが、スコットランドの貧しい靴屋の出身でありながら、優れた才能から良きパトロンに恵まれてエディンバラ大学で学んだジェームズ・ミルは、やがて地主階級の批判者となり、その彼が地代、利潤、賃金への分配関係と資本蓄積の進行に伴う将来のその分配関係の変化を解明するリカードの立論に心酔したことから、二人の交友は始まるのである。

J. ミルは地元の大地主でパトロンであったスチュアート卿の国会議員就任に伴い、ついでロンドンに出て、爾来、ロンドンで文筆生活に入り、雑誌 *Literary Journal* を主宰後は、さまざまな領域で多くの評論を執筆して活躍する。エディンバラ大学でアダム・スミスの弟子の Dugald Stewart に経済学を学んだミルは、スミスの自由主義を信奉し、重商主義的政策に対する鋭い批判を展開した。1808年にミルが刊行した『商業擁護論』を読んだりカードはそれに感服したといわれる。他方でリカードは公債の売買を扱う金融業者として市場で辣腕を振るう一方で、「地金論争」など早くから当時の金融経済界の諸問題について論陣を張り、さらに「穀物論争」にも参加して、「穀物の低価格が資本の利潤に及ぼす影響についての試論」（1815）を発表し、マルサスの見解を厳しく批判した。この「試論」に見られる論理こそリカードの『経済学原理』（1817）に通底する彼の基本的な考え方であるが、これにミルは魅せられたのである。その要点は、資本が蓄積されると人口が増大し、それに対応してより生産性の低い土地が耕作に加わり、そのため穀物価格が上昇し、したがって地主の地代は増加し、また生活資料として穀物を購入する労働者の賃金もまた騰貴せざるを得なくなり、それによって資本家の利潤が反比例的に減少するという単純だが極めて明快な論理に貫かれたものであった。産業資本家側のその対抗手段の起案こそが、穀物価格の低下をいかに政策的に導くかという穀物法をめぐる論争点になる。はじめ穀物量の体系で自らの論理を構築していたリカードは、労働価値説によって改めてその問題を緻密に説き明かした。ジェームズ・ミルがリカードに執筆を強く促し、その実行を熱心な激励と援助で支えたのはまさにこの段階においてであった。その結果が『経済学原理』の出現であり、リカードの課題を解き明かすための演繹的な理論構築の完成であったのである。

5

穀物法をめぐる国会での議論もかまびすしい時期、リ

カードはミルにあてた手紙（1815年10月24日付）の中で、たまたまマルサスとの往復書簡による論争に触れ、「マルサス氏が地代、利潤および賃銀の主題について抱いている見解のなかには、驚くべき混合があるように見受けられます。それについて私に本を書く能力があったなら！」と記した。

これについてミルは反応した。長いがとても印象的な内容なので、その部分を引用しよう。——「拝啓、すでに一週間以上もお手紙のなかで私に期待させてくださった原稿が届くのを毎日待ち構えておりました。また私はイルミスタも調べさせました。バースの馬車が小包をそこに置き去ったということもありうると思ったからです。そしてげんざい私はなにか事故がおこったのかもしれないとあわててだしているところです。それでいま手紙を書くのは当然の問合わせをするという目的のためです。もしとかくするうちに小包が到着しないならば、ギャットコムからの発送を遅らせるようなにごとかが起こったということをお聞きできればこのうえなしです。もしそうなら、それがもうそれ以上は遅延されないことを祈っております。それを見たくて我慢できませんので。私は経済学という科学にたいし情熱をもっていたにもかかわらず、結局はもう長年のあいだ、あなたの教示に富むお話しやあなたの書かれたものによって触発されたときでなければ、それについて考えることができなませんでした。あなたはどのように、『私に本を書く能力があったらなあ！』などと叫ばれるのですか。あなたがものをお書きになることにたいしては、あなた自身の能力へのこのような自信の欠如以外にはなんの障害もありませんのに。あなたはほとんど知識ももたず注意力もたない人々にもっとも理解しやすいようにあなたの考えを書く技術を、すこしばかり練習される必要があります。これはごくわずかの練習によって絶対確実に身につけることができます。私は学校教師の権威を振りまわすのに慣れていまして、したがって私はこの名誉ある資格を正真正銘行使してあなたの計画しておられるお仕事の三項目、つまり地代、利潤、賃銀のうちの最初のもの——すなわち地代に一刻のゆるよもなくとりかかられるよう命じます。もしあなたがその点検を私にまかせてくださるなら、まちががなく私はあなたがそれを片付けてしまわれるまえに、それを完全なものにするようにあなたを強制するでしょう」と。これは1815年11月9日にミルがリカードにあてた書簡の前半部分である。後半は別の話なので省いた。

これに対するリカードの手紙と次に引用するリカードの手紙の中で言及されているミルの手紙は残念ながら発見されておらず、話は中断することになるが、一応話題

はその後もなお継続しているので、そのあとのリカードの手紙も見しておくことにする。リカードはこんなことを言っている。——「・・・／私は衷心から、あなたの気晴らしの時間を多くさいていただいたことを感謝しています。私の原稿の考察にそうしてくださったに違いありませんから、そして、私の書いたものにたいしてあまりにも私を喜ばせる評価を呈してくださったのは私をこつこつと執筆に励むように鼓舞しようとお気持ちから出たことと信じてますが、私の虚栄心が本を出すことによって受けるであろうひどい屈辱を考えられるならば、あなたは刊行を勧められないだろうと思います」と。しかし同時に、続けて次のように書いている。「書こうと思った主題について念頭に浮かんでくることすべて書きおろしてのち、各パラグラフの縁に傍注をつけ、それらの注を吟味しながら全体の配列を行うというご推奨のやり方は大きな助けとなるにちがひなく、とくに未経験の著者にとってはそうだとすることはよく理解できます。で、将来なにを書くさいにもきっと私はそれを実行しましょう。あなたは私の試論の内容について完全な分析を与えてくださいました。そして私の仕事をもっと精緻にもっと系統的にできあがっていたなら、ご提案のような各節の頭の小見出しにまさるものはありますまい、がお伺いしたいのはこのばあい、頭の小見出しにたいして各節の内容は羊頭狗肉になりはしないか、——頭の小見出しのほうが中に実際に書かれたものよりもはるかに多くのことを約束してあるという感じを与えることはないか、という点です。私は各節に小分けする利点に十分気がついていて、——それらは有用な休息の場所であり、また主題の一部から他へのぎこちない移行をとり除きます、がこれらの各節にできるだけ短い見出しをつけるほうがよくはありませんか？あなたはどれが最善かを私よりはるかによくご存じです。同時に私の異議を考慮することを拒まれまいだろうと確信しています。もし12月中でなければ1月にロンドンへ出向かなければなりません、そのさい私の仕事をできるだけもっとも完成した状態でみていただく機会をとらえましょう」（1815年11月17日付）と、かなり前のめりな気持ちになっているようにも受け取れる。

その後も、ミルは、繰り返しリカードに様々な助言を与え、構成上の注意などを授けているが、その師弟関係は文章作成上の問題に限られていて、内容について触れたことは全くないといってよい。

この辺のことについて詳しく書くとキリがないし、また、そのこと自体はここでの主題ではないので、これ以上は述べないが、最後に、リカードの原稿をめぐって二人の間でやり取りがおこなわれていた最後の頃のリカー

ド宛のミルの書簡からその一部を、といってもかなり長いですが、引用して参考に供しておこう。——「・・・おそらく私は全作品の悪口から始めるべきなのでしょう。そうすれば私の誠実さを信じていただけたかもしれない。なぜならそれがあなたの重大な試金石らしいから。しかしながらいまの私には、できるだけ単刀直入に要点に入る以外の時間はありません。そして私はあなたにつきのことを信じる権限を与えます。すなわち、かけだしの初心者としてあなたを励ますようなことは一言もいわないで、あなたが私と同じ達者な古参兵であったならそうしたであろうようにあなたにむかって真実を告げるだろうということ、これです。／私の意見はほんの数語で述べることができます。というのはあなたは論点をすべて立証なさったと思うからです。その証明が否応のないものと思われぬような命題はただの一つもありません。お手紙で指摘された、主として固定資本からの収益であるような商品の価格に賃銀の上昇がおよぼす影響という点にかんする奇妙な結果には、非常に驚きました。しかしあなたの結論の正当性についてはぜんぜん疑いをもちません。その証明は論争の余地のないものと思います。／あなたの除外しておられる場合を別にすれば、労働の量が交換価値の原因であり尺度であるという一般的な原理についてのあなたの証明は、十分でありまた明確です。／A・スミスに反対して、資本の利潤はかの法則を攪乱をもたらすものではないということを明らかにしようとするあなたの叙述と立論は、明瞭です。地代もまたそのように攪乱をもたらすものではない点を明らかにしようとする仮説と立論も同様です。／そしてこの範囲まではこの論究は、あなたがもっとも陥りやすい、あまりに多くの論点を一箇所に詰めこみすぎ、そこにある特定の論点を証明するためのこの科学の全部門を一時に招集するという罪から、いちじるしく免れています。ここまでは議論は説得力があるだけでなく明確であって、容易に理解されます。／・・・／…外国貿易にかんする研究は、その他のものと同じく、独創的で、確固としており、またみごとに論証されています。外国貿易は一国民の財産の価値を増すわけではないという点、同じ種類の商品を国内で生産するよりも外国で生産するほうがいっそう多く要費するのにそれらの諸商品をその外国から輸入することが一国にとって有利な場合があるという点、一国内での製造技術の変化が貴金属の新たな配分を生み出すという点、これらは最高の重要性をもつ新しい命題であり、あなたがそれを完全に証明しておいでです。／それですからあなたは非常に立派な書物の作成へむかって大きく前進なさった。文体もまたじつに優れています。あなたはこの点でもことのほか進歩なさった。もしあな

たがそれをすぐに印刷にまわすつもりであったとしても、変更をお勧めしたであろう表現は、全体でほんのわずかしかなりません。…」(1816年11月18日付)。

見られるようにここでのミルとリカードとの関係は明らかであろう。ミルの努力の甲斐あって、リカードの『経済学原理』は予想以上に見事に出来上がった。ミルが歓喜したことに間違いはないだろう。ミルはもともとリカードの経済学を知って自らの能力の限界を悟り、経済学研究は断念したのである。のちにミル自身 *Elements of Political Economy* (1821) 〈経済学綱要〉という本を書くが、それは経済学の「不朽の原理」をなすリカードの学説の普及のために書いたもので、「新しい発見は何もない」と自ら「序文」で断っているほどである。ミルは実際、リカードの『経済学原理』が出版されると、それで経済学は完成したとして、多くの経済学者を糾合した有名な *Political Economy Club* (経済学クラブ) を立ち上げ、マカロックなどととも「New Political Economy」 「新しい経済学」の普及に努めることになる。そして次にはかねて抱いていたプランに従って、嫌がるリカードを説き伏せ、今度は政治の世界に導くべく努力邁進することになる。

6

リカードの『経済学原理』が、たとえミルの強い要請が影響したことがあったとしても、自らの構想で書かれた学問的な書物であることは明らかである。ミルが理論の上で手出しをする余地は全くなかった。それは単にリカード自身のためだけではなく、経済学における謬説を正し、世の中に自らの信じる考えを訴えるために書かれたことに間違いはない。しかも助言するミルはもっと広い読者のために書き方にも留意できるはずだと口添えさえして、それもある程度実現された、とみられる。本にすることに躊躇したことがあっても、それは高等教育を受けていないリカードの自分自身に対するへつらいの気持ちの現われであったにすぎない。後から人に勧められて出版したのではなく、はじめから出版するつもりで書いたのである。したがって出版をめぐるいきさつが、彼の代表的な著作である『経済学原理』を抽象的で無味乾燥な本にしていたわけではもちろんない。それは何よりも演繹的な論理によって構成された初めての経済学の理論書であったことに由来すると考えるべきであろう。たとえリカードが初等教育の経験しかないとしても、後年まで地質学、鉱物学や数学などに特別な興味と関心を持ち、その学会活動にも参加している経歴からして、科学的関心と才能が見てとれるし、また彼が「別の惑星から来た人」といわれたほどの、頭の切れる人であり、し

かもジェームズ・ミルから演繹法についての個人指導も受けていたという逸話が残っているくらいなので、文章が上手とはとても言えないにしろ、その文章の難解さはむしろ内容の難解さに関わることでありとしか考えられないのである。

ジェームズ・ミルとリカードとの交友関係についてこれ以上ここで触れるのはやめよう。キリがないだけでなく、それ自身ここでの主題ではないからである。詳しいことは先に示した文献を参照してほしい。ミルの懇切丁寧で熱心な指導と助言が繰り返して出てくるのを知ることができる。しかしミルはリカードが『経済学原理』を書き終えると経済学の完成とみなして、その後はそれには興味を失い、リカードの理論の普及のために自ら作り上げた「経済学クラブ」への意欲も次第に低下しがちになった。1819年からミルが東インド会社に就職したという事情もあったかもしれない。それに彼は以前からベンタム主義の実践に深くかかわっていた。彼はベンタム主義の最も熱心な指導者として議会制度改革を主張し、若者を糾合するとともに、熱心な言論活動を通じて、「哲学的急進主義」の運動を展開してゆく。そして次には嫌がるリカードを勧誘して、今度は政治家の道を歩ませることになるのである。保守党でもなく自由党でもなく、第三の道を行くリカードの国会での活躍は高く評価されたが、急病で倒れ、51歳の生涯の最後を、リカードは短い政治家人生で終えたのである。

7

紹介している論文の最初の問題に戻ろう。匿名氏はこう主張していた。一つはリカードの経済学的業績には二種類あって、一つは事実に基づいて実証的でわかりやすく書いたのに対して、もう一方の理論的著作は、事実に拘泥せず、きわめて抽象的で、事実に対する意味付けもないし、そもそも人に見せる目的で書かれたものではなかったのではないか、というのであった。もし多くの人に読ませるつもりなら、事実に即してもっとわかりやすく書いたはずだというのである。そしてマカロックや J. S. ミルの証言もそれを背後から根拠づけるもののように説明されていた。しかしそれは問題の性格を見損なっているようだ。ジェームズ・ミルとリカードとの往復書簡の発見によって、事実関係も従来の推測が必ずしも当たっていないことが分かった。問題は、とくに他人に読ませる目的で書かれたものではなかったという後者の理解にある。実際には、後からミルに勧められて出版したのではなく、最初から自らの所信を出版して世に問いたいという気持ちがあったのだ。そのことに、ミルが助言し援助し激励したということであった。ミルはリカードに

平易に書くように訓練すべきだとさえ言っているのだ。だから、考えてみると、これこそはわざわざ従来の経済の日常的な体験から距離を置いて、抽象的な形での理論構築を考えた最初の経済学の成立の経過そのものを語っていることになるのではないだろうか。それがイギリスの長い経済学の歩みの中でも、極めて大きな転換点であったために、その理解に戸惑いがあったのではないか。

すでに知られているように、イギリス、フランスなどでは、経済学的研究は商品経済の拡大発展に伴って、17世紀にはすでに始まっていた。商品や貨幣そして資本はすでに出現していて、利潤や利子の具体的な考察も見られる。商人や哲学者あるいは医学者などがそれらの経済的範疇を取り出し分析し、その内実を問い、その存在の意義を明かにすべく努力していた。当然、当初は生活の日常性の中での経済的意義を問うものであり、帰納的分析的な方法がとられた。18世紀も半ばになるとイギリスやフランスでは、それらの経済的諸範疇の整理統合とその体系化が図られるようになってくる。その過程で、日常的な世界とそれと区別される日常から離れた虚構的な世界が理論として形成されることになる。そのいわば専門的な学問の世界ではその認識と叙述の過程で様々な論理的方法が検討され、やがてフランスなどでは精緻な演繹的方法による理論体系も生まれてくる。匿名氏が取り上げているリカードの問題はまさにそのような思想状況に関わるものになるのではないのか。リカードは「私は原理が正しければそれが効用を持っているかどうかは気にかけません」(Sraffa ed. *The Works of Ricardo*, Vol. VI, p. 163) と手紙で述べているが、続けて彼が言っているように、彼は、『経済学原理』によって経済の「真理性」をこそ確立したかったのである。

リカードやその弟子筋にあたる J. S. ミルの経済学に対して、その演繹的方法を激しく攻撃して、対するに帰納的方法を対置したのは19世紀中葉のイギリスの歴史学派の経済学者であった。匿名氏がこの論説を発表したのは、その出現からそれほど隔たった時期ではない。そしてその出現の根拠はリカードなどの経済学の有用性の欠如にあったことは確かであるが、リカードにとっては有用性などはもともと問題ではなかったのだ。

しかし匿名氏の論文の表題がまさに示しているように、事実との対応関係の問題は当然まだ生きている問題だったはずだ。イギリス経済学における経済学の有効性の評価をめぐる正統派と歴史学派に分かれた対立が、ここにまた姿を現したとも読めよう。例えば銀行券をめぐるリカードの主張はわかり易く理解できるが、『経済学原理』の方は何ら日常性との接点もなく抽象的過ぎて理解できないとしても、それは著者のモノローグとみれば

わかる、ということのようだが、それではあまりに安易な理解で、論文として穏やかでない。たとえ日常性から乖離した議論だとしても、それが仮想的な学問の世界での抽象であることぐらいは分かるのではないか。ただそれがイギリスの経験論的な学問的伝統のなかでもあまりにも唐突な出現であったかもしれないということはある。

実際リカードの『原理』の特徴をユダヤ的体質のせいにしたマーシャルのような人物もいるが、それに輪をかけたような人種差別を唱える経済学者もいないではない。しかしその演繹的方法はなにもユダヤ人に特有な方法であるはずもなく、先にも述べたようにヨーロッパからの伝来の方法であって、リカードは、伝えられるように、ミルに「長い間の散歩中、もっぱら方法論の授業を伝授されていた」(E. Halévy, *The Growth of Philosophic Radicalism*, London, 1972, p. 272) というエピソードもあながち根拠がないともいえない。実際、息子のジョン・S・ミルの『論理学体系』(1843)も、その中でその方法を体系的に、また肯定的に叙述している。

考えてみれば、これこそマルクスのいう経済学の方法における展開の転換点、つまり下向から上向に向かって転回する方法上の屈折点を、具体的に経済学史上の表現として表している場所になっているところではないのか。マルクスは言っている。——「最後にリカードがその間に踏み込んで、この科学に向かって、止まれと号令する。ブルジョア体制の生理学—その内的な有機的な内的関連および生活過程の理解の一基礎、出発点は、労働時間による価値の決定である。そこからリカードは出発し、今やその科学にたいして、それまでの慣行を放棄し、次のことについて答弁するように強要する。すなわち、この科学によって展開され叙述されたその他の諸範疇—生産関係と交易関係—が、この基礎の諸形態、出発点、にどこまで一致するかまたは矛盾するかということ、すなわち単に過程の諸現象形態を反映し再生産するにすぎない科学（したがってまたそれらの現象そのもの）が、ブルジョア社会の内的関連つまり真実の生理学の土台またはそれらの出発点をなすところの基礎に、そもそもどこまで適合するかということ、すなわちこの体制の外観上の運動と真実の運動との間の矛盾はそもそもどんな事情にあるのかということについてである。したがって、これこそは、この科学にたいするリカードの偉大な歴史的意義なのである」(マルクス『剰余価値学説史』II, 大月書店版『マルクス=エンゲルス全集』第26巻第2分冊, 215-6頁) と述べているのは、まさにその事情を指しているといつてよい。しかもこれは何もマルクス経済学にのみ関わることでもないはずなのだ。

興味があるのは、リカードの時代にあっても、19世紀末のこの論文の執筆者の時代にあっても、イギリスではそれが常に経済学の現実に対する有効性への疑問と重なって出てきているという点である。それを超える視角は実に20世紀の30年代にイギリスのケインズによってマクロ経済学が提唱されるまで、提起されなかったし、十分意識に上ることもなかった。経済学が国境を持たず一般的・抽象的に論じられていた限りでは、経済学はその有効性を具体的に発揮できる場所をもたなかった。それは事実にかかわりがあるかに見えて実は役に立たない哲学的興味の対象でしかなかった。しかし資本主義が現実には巨大な危機に直面せざるを得なかった時、ケインズが登場して経済学を一国内に領域を定め、実際にそこで雇用を決定する「資源」を統計的に把握することによって、裁量的な政策の実施を可能に導いた時、経済学は自らの経済学的限界を意識すると同時に、初めてその果たし得る有効性にも気づいたはずなのであった。1960年代になって資本主義が再び危機に陥ったとされた時、ジョン・ロビンソンが改めて経済学の有効性の喪失という問題に対して、『経済学第二の危機』を論じて警鐘を鳴らしたのも記憶になお新しい。

そこまで話を広げなくとも、1887年の日付をもつこの小論文が示していたのは、経済学が日常的感覚から離れ得ないでいる状況の中で、経済学に対する専門家の理解でさえ、まだこの程度にとどまっていたということが分かったということなのであろうか。逆に、混乱した理解がここまで時間をかけて収束してきたことから、リカードの『経済学原理』の出現がいかに経済学史上画期的な出来事であったかが理解できたということなのであろうか。

8

とはいえ、まだ論文は続いている。先へ進もう。

この論文の筆者の匿名氏は、リカードの『経済学原理』が自分自身のために書かれたもので、人に見せるためのものではないという説明は、この本の構成が経済学の各分野に振り分けられた様々な問題についての独立論文の寄せ集めであり、決してリカードが書くような体系的な説明になっていないということからも分ると述べている。全体を見ると、構成が体系的とはいえず粗雑で不備で論旨が不徹底だと言っているのであらうか。

その点はこれまで触れてこなかったのだが、リカードの通称『原理』そのものの正式の表題が『経済学及び課税の原理について』(On the Principles of Political Economy, and Taxation)であることにも関係するのだが、本書が租税を論じた部分を大きく含んでいることにそれはかか

わることになる。もちろん森嶋通夫氏がかねてより主張しているように、表題のカンマの位置づけによって、表題も『経済学原理と課税』とすべきだとすると、意味はだいぶ違ってくる。しかしこれは当時のカンマの過度の使用法にもよるが、無理な解釈と思う。とすれば、課税に原理があるのかということにもなるが、やはり純粋に「経済学」の「原理」だけを扱っているとは言えないからだ。ただそれらは、マルクスが『剰余価値学説史』のなかで、リカードが租税を扱った章は「原理」の適用にすぎないと述べていたように、リカードが主要な命題に関連させて説いた副次的な問題とも考えられるのであって、それが「経済学の原理」としての純粋な性格を弱めたことがあったとしても、主要な命題の意義は際立っていると考えることはできるだろう。しかも匿名氏はその問題が『原理』の後の版よりも最初の版に顕著だともいっているのである。もちろん初版では技術的な不手際があって、著者の校正の過程で二つの章をさらに二分する必要が生じたため、同じ番号の章が二回出てくるなどの無細工が生じたが、それはただの形式的なミスである。したがってそれを別にすれば、指摘しているのは『原理』としての体系的な意味付けの曖昧さの問題ではなくて、各章の中身に関連する問題であらう。

初版と最後の第Ⅲ版との大きな違いは、第1章の価値論の内容であり、さらに新しく加えられた第31章の機械論である。第1章の違いはある意味決定的で、初版は、マルクス経済学的に説明すれば、賃金の変化が生産価格に及ぼす影響についての議論が中核をなすが、Ⅲ版における違いは、マルクス経済学的な価値から生産価格への転形の問題が主題に変わったことである。ただ、その点が明快に解き明かされているわけではないので、この執筆者に理解されているとはとても考えられない。また、Ⅲ版で新たに追加された機械論は、機械の利用が労働者にとっては必ずしも有利に働くとは限らないことを明らかにしたもので、リカードの偏りのない科学的精神の現れとされているものである。これらの問題にはこれ以上深入りはしないが、他の箇所は改版に際して、あまり大きな修正や加筆がみられないので、筆者の言い分には論評しにくい。ただ大幅に改訂された第1章については、内容的に古い版より新しい版の方が優れていることはこの論文の執筆者も多分認めるだろう。しかし独立論文の寄せ集めだという指摘はあるいは否定できないかもしれないと思う。確かに、この本の租税論の後の後半のかなりの部分が、構成的な位置づけのはっきりしないもので、独立の項目がそれらの項目の補記のような雑多な章と無秩序に並んでいるという印象がある。ゴンナーも自らの編集したリカードの『経済学原理』に付した「序文」で、

そのようなことを述べていた。だが本書の最初にみるように極めて体系的で、構成もしっかりしている第1章から第6章、あるいはさらに第7章までを加えた部分が、本書の体系的な性格を印象づけていることは間違いない。マルクスも「リカードの理論ははじめの6章の中に含まれる」と述べていたはずだ。だがその整然たる構成で細部までも一貫できるほどには、リカードの構想力と筆力が足りなかったのかもしれない。だから簡単には結論づけられない面が残っていると、リカードにおける「経済学」の「原理」の確立の意義は認められるべきであろう。

ただここにきて匿名氏は次のようなことも言っている。多分、何らかの広い範囲の読者に対して、わずかの参考資料しか使わないで文章を書くということについて、リカードは、その不規則につながっている各章の中で、彼自身諸原因の作用についての単純な言明で満足していたのだろう、と、リカードは彼自身によって認識された一つの原因が作用した歴史的事例のあれこれについて言及することはできたかもしれないが、ここでの目的のためにはその言及は不要であり、それは体系上では除外される。もし彼が具体的な説明をしたかったら、「1,000ポンドの一商品の価値が1200ポンドの上昇したと仮定しよう、とか、800ポンドに下落したと仮定しよう」等々と、言いながら何回でも議論できるような事例を作るとは至極簡単にできるのである。リカードは言う。「私の目的は、原理を解明することだ。それを成し遂げるために、私は十分可能性のある事例 (strong cases) を想定し、その原理の作用を示したかったのだ」。

これはかなりまっとうなとらえ方だと思う。リカードの strong case という言葉は誰もが知る彼の特有な抽象方法の呼び名だ。匿名氏はさらに続ける。

すなわちリカードは、他方、彼のパンフレットの中では別の目的で書いており、はっきりした出典も示しているという。彼のパンフレットで扱われる主題は通貨と小麦の貿易の自由化の問題に限られているが、そこで彼の長年の経験で培われたその議論の方法も意義深いものであった。しかし同じ問題が『原理』の中だと、抽象的な原理の問題と同じように実際的な事実との検証もないし、事実の役割の検討もない。ただ彼の本の抽象的な議論の背後には、事実と考察の大量の準備があることは確かなのであり、何時でも要求に応じられる実証の準備はできていたはずだと断じている。事実の理論への対応ということが依然として求められているのであるが、同じことは、穀物法に関するリカードの議会での演説などでよく現れていると匿名氏は断じているのである。

確かにそこでは、純粋な理論の分野が確立されつつあ

るような印象は受けるものの、やはり理論は最終的には経験的事象によって検証されないと、理論そのものの整合性だけでは確信が持てないということなのだろうか。ここではリカードが事実や証拠は十分持っているが、あえて示していないだけで、ということであまり安心しているようにすら見える。そうだとすれば、それはリカード自身の理解とは違う。前にも示したように、リカードは理論の効用ははじめから問題にせず、その論理だけの真理性を求めていたからである。

19世紀の前期にリカードに代表される経済学の有効性がイギリスの国会の政治家たちの間でしきりに疑問化されていた頃、ジェームズ・ミルは、Whether political economy is useful or not? A Dialogue between A and B (*The London Review*, Vol. III, No. 4, 1836) という論文を執筆して大いなる問題を提起した。経済学は天文学のように、人間生活に直接役に立つわけではないが、その理論構造のもつ見事さによって人類にとっての有用性を評価できるとする見解で、当時であって、その経済学の理論の存立意義を説いたものである。しかし、これはジェームズ・ミルの遺作ともなった貴重なものだが、その内容の難解さのためか、その後、論壇で大きく問題になったことはなかった。やがて現れるイギリス歴史学派の面々によって、リカード=J. S. ミルなどのいわゆる正統派の経済学は、その抽象性とそれによる有効性の喪失をもって信頼を失い、反対派の歴史学派もただその実証的な歴史分析の中にやがて埋没して、ともにただアカデミズムの中でのみ命脈を保っていたと言っていたであろう。ジェームズ・ミルの独自の「経済学原理」の考え方、あるいは其の息子J. S. ミルのいうような「科学というものは、真理に関する一個の首尾一貫した体系であり、自然領域のある明白に限定可能な部分に関する全体的原理である」(J. S. ミル、熊谷次郎訳「マーティン・ノー女史の経済学」[J. S. ミル初期著作集2] 御茶の水書房1980年、所収、301頁) ものとしてのその真理性の把握は、「経済学原理」という概念の確立を経ずには成り立ちえない。リカードの同時代人であったDeQuincyなどによってその論理性を高く評価されたリカードの『原理』の体系の意義はやがて見失われ、J. S. ミルによるその継承もかえって不明確なものへと拡大し、やがてはワルラスやマーシャルなどのように別の新しい体系が準備されることになるのだが、この論文の執筆者である匿名氏は、実はそれ以前の19世紀の人である。この論文も前に記したように1887年に発表されたものだ。執筆者はワルラスの『純粹経済学要論』(1874)は知っていたかもしれないが、マーシャルの『経済学原理』(1891)はまだ刊行されていない。ただ、リカードの『経済学原理』

が特別の抽象的な学問分野として設定されていたことは理解している。しかもその抽象的な学問分野が、広く深い学識と経験に裏付けられた対象から根拠を得ているものであることも確信している。洞窟の奇人の仕事ではなくて、対象の違う学問分野として理解しているように見える。対象の違いによる一種の使い分けとして理解されているようだ。

最後に匿名氏は次のようにまとめている。リカードは多くの人々を対象にする場合には準備を怠りなく説明にも豊富な事実を取り上げるが、他方で、彼の主著の方では、彼の周りの具体的な世界はただ除外するという形になっている。「そういうわけで、同じような環境に置かれれば、彼は同じような問題でも同じ実際のな方法で扱うに違いないし、完全に理論と事実との領域を完全に分離するような論考の中で現れているものは、著者の知的習慣とか彼の力量の限界などではなくて、構成上の特別の事情によって論考に与えられる単なる特殊な性格付け (cast) にすぎないと考えることにするのが適当なところではないか」(“Ricardo's Use of Facts”, *Ricardo / Critical Assessments*, op. cit. Vol. 1, p. 9) と。リカードがそういうことを試みることはないと思うが、それにしてもこれは少なくとも、単に抽象と具体との対比というだけでない。理論と具体的分析の方法の違いを含めた区別にかなり近づいた説明といえるかもしれないと思う。そしてそのような理論と実証分析との分離は、マルクスが行ったような厳密な意義づけは行われなままに、様式的に経済学の流れの中で一般化していくことになる。

そしてそのような抽象的な理論分野の独立は、その後、多分、ケインズによるマクロ経済学の確立によって、それと区別されるミクロの経済学領域の独立として、ワルラスの純化された市場理論体系を基に、改めて把握しなおされることになると思うが、それは経済の実体を商品経済の機能的な側面から認識することになるはずだ。そして他方、不十分ながらも、人間生活の経済実体を商品＝資本の形式を通して論理的に明らかにしようと努めたリカードの道は、同じく経済の実体の側から商品経済機構を通してその原理的説明を試みるマルクスによって受け継がれることになる。マルクスは周知のように、『資本論』の構想をいわゆるプラン問題として、しばしば各所で語っているが、1862年12月18日のクーゲルマンに宛てた書簡の中で、みづからの「資本一般」の内容が、イギリスの経済学者の呼ぶ「経済学原理」の内容を含むことを述べるとともに、その「資本一般」が、その前篇をなす「商品・貨幣」とともに理論の「核心」であることを明らかにしている。

9

経済学が人間の経済生活を対象にしており、それを商品・資本概念がいかにしてその対象としての生産実態を理論的に把握できるかの問題として、経済学を考えるのでなければ、経済学の成立はあり得ない。しかし同時に、資本主義経済の実態が、昨今の新型コロナ・ウイルス禍状況の中にあらためて認識させられているように、もともと国境で国家に圍繞され、しかも歴史や制度や慣習などに大きく支配される存在であり、市場万能の商品経済の概念だけで把握できるような対象ではない、という自覚も欠かせない。実際、1930年代の世界大恐慌に際して、人間でありながら商品として扱われる労働者の実際の雇用を決定するリソースは何かということにケインズが気づいたときに、マクロ経済学の成立の可能性が出てきたのだと思う。ミクロ経済学の対象はその時初めて虚構の世界の確実な「原理」であることが理解できるのであり、資本主義経済社会を理解するための基本的な構造をなすものであることが明らかになる筈である。ただ、化外の者として、80年代以降、アメリカを中心として体制化されつつある新自由主義経済学なるものの展開を眺める時、数学利用の理論的抽象化の蔓延が窺われるばかりで、経済実態の解明にはほとんど寄与していないようにしか思えず、さらにデータ・サイエンスの予想する同質の未来像を打ち砕き、新しい未来を構想するためには絶対に必要な異質の思考を、安直に排除するような、現在の狭隘な学問状況への不安とともに、深く憂慮している次第である。

しかしそれにしても、経済学が人間の経済生活をいかに確保し、いかにそれを持続拡大してゆくかの問題を全面的な対象としている限りで、アダム・スミスの労働価値説を前提として、それに対する商品経済的な諸関係がその実態 (実体) をいかに包み込んで、いかにその機能を通じて、経済社会を維持発展させてゆくかを、スミス以来の古典経済学が明らかにしようと試みたことは、まことに称賛に値する。そしてまたスミスが輪郭を描いた経済学の対象を、リカード自身がその『経済学原理』の「序文」に記したように、「テュルゴー、スチュアート、スミス、セー、シスモンディその他の人々」の業績に学びつつ独自にその中身を構築していったリカードの道筋こそは、経済学史上に登場した初めての理論経済学者であった証左と言ってよいのである。

そして、“Ricardo's Use of Facts” (「リカードの事実の取り扱い方」) を執筆した匿名氏の最後のまとめは、あの時代にあって精一杯の整理だったかもしれない。確かに抽象的説明と具体的説明の差ということを超えて、対象領域の違いによる理論構成の相違を一応指摘してい

るとみられるからである。しかしそうはいっても、最後に実証的に検分されなければならないという要請はまだ担っているとみてよい。ただイギリス古典派は、リカードとミル親子による営為を通じて経済学の「原理」の独立を指し示していた。それは長いイギリスの伝統的な経験論の立場とは相容れないものであったかもしれない。しかしそのリカードの本質はミルなどがはっきり述べているように、一つの抽象的な対象をとらえた完結した構造体の論理的な体系であり、理論的なその整合性をもってその真理性が確かめられるものであったはずだ。それは J. S. ミルが『論理学体系』で試みたように、経験的に対象化された概念を単純なものに整理していく段階から、それを一定の論理的順序をもってより具体的な概念化への方向に展開していくという方法の例示としてのリ

カードの『経済学原理』の存在の証明ということに他ならない。マルクスのいえば、それはまさに下向から上向への論理的転換の屈折点で、経済学史の展開の上で、極めて重要な位置づけが与えられなければならない問題だ。しかも経済の原理的把握があってこそ、初めて次の経済実態の具体的解明に向かうことができるのだ。

そうであれば、この Wood の編集したリカードの重要な文献集の冒頭に置かれた論文で、「リカードによる事実の意義づけ (use)」を論じた匿名氏こそ、ある意味では、具眼の人であったのかもしれない。読み終わって感じたのはそういうことであった。[2020. 8. 10]

(エッセイの性格上、引用句の出典は文中に記し、文献類は省略した)